

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ（留学目的）		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
01-009	ベトナムにおけるフランス植民地時代調査の考古資料の復元		
	ベトナム	ハノイ国家大学ベトナム研究文化交流センター	
	俵 寛司	九州大学大学院	特別研修生

研究テーマ（留学目的）の説明（助成決定時のテーマ。文責は本人）

仏領インドシナ時代ベトナムでは、ハノイに拠点を置いたフランス極東学院を中心とする考古調査資料は膨大な量に及ぶ。しかし詳細な調査報告のあるものは少なく、また重要資料が骨董品や博物館コレクションとして欧米、日本などの海外に分散所蔵されていたり、資料の多くがいまだ整理を経ておらず、遺跡、遺構などの考古学的情報についてすらその完全な実態を把握することは非常に困難な状況にある。そしてベトナム独立以降の考古学、歴史研究は、単にベトナム古代史の領域としてばかりでなく現代政治とも密接に結びつき、国民国家ベトナムの主体的イメージを創造することにおおきく貢献してきた。したがって仏領インドシナ時代の調査資料の復元研究においては、近現代の考古調査をめぐる社会・文化誌的コンテキストの復元が必須である。

これらの問題解決において、各博物館に所蔵される未報告資料を再調査、資料情報化すること、そして調査記録に関する文献調査や社会調査などを統合したインドシナ考古調査資料の歴史的・社会的復元を行うことが本研究のおおまかな目的である。

具体的には、第1にハノイ・ベトナム歴史博物館において仏領インドシナ時代調査資料の基礎調査を継続し、オロフ・ヤンセが1934年から1938年まで実施したインドシナ第1次調査、第2次調査資料およびフランス極東学院によって調査された1910-30年代調査資料についても資料化、データベース化したい。第2に調査記録や収蔵目録、公文書などの史料について、社会科学通信院（旧極東学院）ほか国家図書館などでの複写、記録作業を行いたい。また各機関での関係資料の調査と資料化を実施しながら、地方での調査、特にタインホア省を中心とした現地調査を実施したい。

成果報告書

助成番号

01 - 009

氏名 俵 寛司

留学先国名

ベトナム社会主義共和国

機関名

ハノイ国家大学ベトナム研究文化交流センター

1. はじめに

本稿は、助成研究のテーマである『ベトナムにおけるフランス植民地時代調査の考古資料の復元』に関する調査研究の成果報告書である。

報告者は、2001 年 7 月、貴財団から松下アジアスカラシップの助成認定をいただき、ベトナム留学の機会を得ることができた。博士論文執筆者資格の取得準備のため 2002 年 9 月から留学を開始し、2003 年 2～3 月は学位取得のため帰国したが、SARS(重度肺炎)の影響からベトナムへの再入国が難しく 4 月再開となった。研究の実施内容・期間を補完するために、2 年目(2003 年 9 月～2004 年 8 月)には、実施期間を数ヶ月間延長し、翌 2005 年 2 月に帰国した(5 月に現地整理のため再訪)。一時帰国の期間を除き、実質的な留学期間は通算で 2 年である。

本研究(留学)の実施に際しては、深甚のご理解、ご援助いただいた貴財団と関係者の方々に心から感謝いたします。

2. 研究の目的

本研究の主な対象「資料」は、ベトナムの考古学・古代史についての関連資料(主にドンソン文化・漢文化)とその様々なコンテクスト(文脈)である。

ベトナムは 19 世紀後半から 1945 年までフランスの植民地下に置かれていた。1945 年には独立宣言が出されたものの、第一次インドシナ戦争、ベトナム戦争の間、国土は分断され、1975 年国土統一以後も中越戦争、カンボジア戦争などによる混乱が 1990 年前後まで続いた。この間、数多くの考古学的調査や遺物収集が、旧宗主国のフランス、ベトナム人研究者を中心に実施されてきたが、フランス植民地時代の資料については、詳細な報告は少なく、海外に資料が分散するなどの問題がある。独立後のベトナム国内では、長期間にわたる戦争や複雑な国際関係、経済的事情もあって、少数研究者の地道な努力にも関わらず、膨大な資料の整理や公開は進んでいないのが現状である。さらに、発掘後半世紀以上が経過し、出土資料ばかりでなく調査時の記録類や「記憶」も風化しており、復元は困難となってきている。

このような深刻な問題の解決を図る上で、第一にベトナム国内の大学・研究所にある一定期間所属し、各地の基礎資料の調査と再整理を行うことが不可欠である。第二に、考古遺物ばかりでなく現地社会との協力のもとに、トータルな調査を軸とした地域史の復元が必要である。そして第三に、より進んで現代史の上で考古学・考古調査が果たした社会史・思想史の解明が求められる。それは考古／歴史資料が置かれた社会的コンテクスト(あるいは物語)は、特定の時代や地域によっても異なるからであり、植民地時代資料の「復元」には、常に現代史的課題が与えられていると考えるからである。

3. 調査研究の内容

留学1年目(2002年9月～2003年8月)の前半は、従来行っていた仏領時代ベトナムの考古学資料に関するフランス、アメリカでの調査成果に加え、現地での調査・学習の成果をまとめ、博士課程での学位論文を一応完成させることができた。そして2003年2月18日の最終試験を経て、2月21日付けで九州大学大学院比較社会文化研究科より正式に博士号が授与された(比文甲第41号)。以下に論文の要約を述べておきたい。

本研究は、これまでのベトナム古代考古学にみられる「ベトナムモデル」「中国モデル」という2つの解釈モデルを検討し、その歴史性と政治性を明らかにする。さらに、仏領インドシナ時代ベトナムにおけるドンソン文化と漢文化関係の考古学的調査資料の復元を行い、それらの考古学的分析を通して2つの解釈モデルを再考することに、本研究の目的がある。本論Iでは、そうしたベトナム古代考古学に関する実践性について「中国モデル」「ベトナムモデル」という2つの解釈モデルを軸として歴史分析的に検討し、問題の所在を明らかにする。19世紀阮朝ベトナムの「中国モデル」とは、観念としての「中国」的世界観を取り入れ、自らを「中国」と位置づけるもので、「古典的規範」としての伝統的歴史学にも影響を与えた。仏領インドシナ時代ベトナムに出現した「新しい古典的規範」としてのフランス東洋学は、19世紀以来のフランス近代国家における人文科学アカデミーとオリエンタリズムとが複雑に絡みあいながら形成された知的支配のテクノロジーであり、東洋考古学は、東洋学の美術歴史主義に起源を持ちつつ進化・伝播主義の考古学を取り入れたもので、ベトナムでは1930年代にオロフ・ヤンセの「インドシナ考古学調査」によって本格化した。そこでみられる「中国モデル」とは、支配する対象としてのベトナムを「中国」的世界の周辺の知識へと還元するものであったが、次の2つの断絶を伴いながら忘却された。

第1は、国民主義／ナショナリズムのベトナム考古学の「ベトナムモデル」の台頭であり、第2は、ベトナム戦争後の中国・欧米諸国とベトナムとの断絶に起因するものである。しかし「中国モデル」「ベトナムモデル」いずれの解釈モデルも、主体の位置によって構造化された支配／従属関係にもとづく知識(「解釈」)を過去において全体化する傾向を持つのである。

最後に、以上のような「解釈」について、「中国モデル」「ベトナムモデル」の検討と絡めて省察した。結果的に、それぞれの「解釈」は、「中国モデル」「ベトナムモデル」の相克の中で対象化されなかった部分に光を当てたものである。銅鼓の動態は、起源論は別として、ベトナムの銅鼓に一つの系統が生み出される過程を明らかにし、また、北属期開始期のベトナムの「在地的集団」におけるアイデンティティ(あるいはエスニシティ)も実は、複数性をもち、自ら操作可能であることを強調し、そしてベトナムの漢系墓の特質を明らかにすることで「中国モデル」自体の再検討につながることで、「ベトナムモデル」の可能性にもつながることを示唆した(『ベトナム古代考古学の研究—仏領インドシナ時代におけるドンソン文化／漢文化調査資料の復元的考察』)。

2002年1月から3月にかけては、最初ハノイ・香港で発生し、のち中国を中心に世界的に流行した重症肺炎(SARS)の影響により、ベトナム再入国自体に真剣な検討を迫られた。結局、ベトナムでの沈静化の動きを慎重にみながら、4月に留学を再開することとなった。次なる目標は、博士論文の内容の完成度を高めるためにも、ベトナム国内における未調査資料の収集と現地でのフィールドワークであった。ところが、ベトナムでの指導教授であるチン・カオ・トゥオン博士の健康状態が4月より悪化し、5月には末期ガンであることが判明した。私を含め、多くの方々の看病と支援の甲斐もなく、トゥオン博士は8月に永眠した。私にとって、博士の指導を通じて、自らの研究課題について探求するというのも重要ではあったが、人間の生命という現実的問題に直面したことは、その後の研究姿勢にも大きく影響を及ぼすこととなった。博士の死とベトナムの現在を重ね合わせることで、より実践的な課題について模索しながら、調査研究を継続することを決めたのである。

以下では上記の期間中に実施したいくつかの調査成果について記す。

- (1) ハノイ市近郊フーラン村における伝統的土器製作についての調査実施(2003年4月)
- (2) ベトナム旧石器～新石器時代関連資料についての調査実施(2003年5月):ハノイ歴史博物館に保存・展示される仏領インドシナ時代調査のホアビン文化遺跡出土遺物、特に動植物遺存体(貝類中心)についての調査。ハノイ歴史博物館に保存・展示される仏領インドシナ時代調査のホアビン文化遺跡出土遺物、特に動植物遺存体(貝類中心)についてである。ホアビン文化はベトナム北部ホアビン省の内陸部石灰岩地帯の洞穴遺跡を指標とする東南アジア大陸部を代表する初期新石器時代文化(かつては中石器時代)とされるが、その成立時期、環境条件、生活様式の問題については不明なところも多い。従来、ホアビン文化遺跡からは淡水産の貝類が多く出土するところから内陸部河川が主要な食物採集源であるとみなされていた。調査の結果、汽水産貝類の含有も認めうること、前後する時期で红河デルタ北部のバクソン文化において多量の海貝もみられることなどから、少なくとも新石器時代初期のベトナム北部海岸部にはマングローブ林が形成され、ホアビン文化の主要な食物採集源となった可能性がある。このような仮説は、従来みられた農耕停滞論ではない、東南アジア大陸部の環境多様性を基盤とする新石器時代の人類と環境との共生を考える上で重要なものである。
- (3) ベトナム南部地域における古代ガラスと古環境に関する調査実施(2003年5月20～27日):ベトナム南部ホーチミン市歴史博物館、カンゾー地区博物館およびマングローブ保護地域での調査。ベトナム南部地域は、先史～古代北部よりいち早くインド文化の影響があり、ガラス製品もその時に直接輸入されたと考えられてきた。ところが最近の調査研究では、紀元前後数世紀の間、メコン川東部地域においてガラスの現地生産が行われていたことわかっている。原料は現地に豊富にある白色砂(硝石)が利用できるが、問題は1400℃を越える高温をいかに獲得したかと言うことである。現地調査の結果判明したことは、当地域には豊富なマングローブ林が存在しかつ、そこから作られる炭から十分な高温が得られるという事実である。すなわちメコンデルタ西部地域と比較し、東部地域における古代ガラス生産の発展の要因としては、単にインド方面との活発な交易によるのではなく、現地における有利な環境条件を生かして、逆に輸出地としての役割を果たした可能性がある。具体的な検証作業は今後の課題であるが、このような古代ガラスの研究は、東南アジア・ベトナムにおける「インド化」の実体について再検討する上で、重要な手がかりを与えるものである。

留学2年目はハノイ市周辺での資料調査から、各地方の遺跡地・博物館での調査・フィールドワークに比重を移した。体調を壊すなど諸々の事情から調査内容は限定的なものとなったが、比較的重要であったのは、現地の方々と触れ合う機会に恵まれたことである。調査に協力いただいた関係者の方々には感謝したい。

- (4) タインホア省におけるドンソン文化・漢文化遺跡資料の調査・フィールドワーク(2003年9～11月;2004年1月):ヤンセがベトナム北部タインホア省で調査したドンソン遺跡は、ベトナム北部の代表的な青銅器/初期鉄器文化である「ドンソン文化」(Van hoa Dong Son 前3～後1世紀)の指標遺跡であり、また同じく彼がタインホアで調査した多数の漢系墓(主に後1～後3・4世紀の磚室墓)には、中国王朝の支配(前111～後938年 ベトナムでは「北属期」という)が開始した頃の様相を従属関係あるいは単一の政治領域によって規定されたものではない、より複雑な社会的背景があると考えられる。省博物館での資料調査および各地のドンソン文化・漢文化遺跡の調査では、紀元前後頃のドンソン系・漢系墓の未報告・新出資料が確認され、また、現地での生活や地元調査への参加などを通じて、現地の方々と交流が深まり、地理的・歴史的状況を深く理解することが可能となったことは大きな収穫である。調査成果については現在も整理中であり、ハノイ歴史博物館の関連資料とあわせてまずベトナムで発表する予定である。
- (5) ベトナム西北部・中部における青銅器時代遺跡の調査・フィールドワーク(2004年2月):ベトナム西北部の中越国境地帯(ラオカイ省)での調査。既発表資料についての再調査ではあったが、古式の銅鼓を出土した重要遺構の遺物セット関係が確認でき、特に中国雲南省・貴州省方面に広がる青銅器文化・漢文化との比較資料が得られた。その後、中部沿岸部地区での遺跡踏査・フィールドワークを実施した。
- (6) ハノイ市近辺における中近世資料の調査(2004年8月15～24日;12月上旬):ハノイ歴史博物館における9世紀～17世紀にかけてのベトナム産陶磁器・各国貿易陶磁器資料の調査;ハノイ市タンロン城(バーディン皇城遺跡)での遺跡調査、シンポジウム参加。
- (7) ホーチミン市歴史博物館での資料収集・整理(2004年11月～12月)。

4. 出版物による成果

<著作(学位論文)>

- 2003 『ベトナム古代考古学の研究－仏領インドシナ時代におけるドンソン文化／漢文化調査資料の復元的考察－』九州大学大学院比較社会文化研究科博士課程学位論文(比文博甲第 41 号 2003 年 2 月 21 日)

<論文>

- 2002a 「ベトナム漢墓ヤンセ資料の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 97 集 pp 123-192 国立歴史民俗博物館 佐倉
- 2002b “The origin of the Janse collection and its problem” Abstracts presented at the 17th International Congress of Indo-Pacific Prehistory Association. Academia Sinica, Taipei, Taiwan.
- 2003 “A History of Vietnamese History- From ‘Dai Viet Su Ky Toan Thu’ to Archaeology after 1954.” In: Anna Karlstrom & Anna Kallen (eds), *Fishbones and Glittering Emblems: Southeast Asian Archaeology 2002*, pp 445-458. Museum of Far Eastern Antiquities, Stockholm.
- 2004a 「ベトナム社会主義共和国 ドンソン遺跡と漢代の遺跡」『考古学研究』第 50 巻第 4 号(200 号) pp31-33 岡山
- 2004b (翻訳)「南アジア・東南アジアの諸文明」ヨラン・ブレンフルト編 大貫良夫(監訳)・西秋良宏編訳『図説 人類の歴史』pp201-235 朝倉書店 東京
- 2005 「近代としての東洋」『東南アジア考古学』東南アジア考古学会(印刷中)

<学会発表>

- 2002a “A Vietnamese history and its museum collections.” In the 9th International Conference of European Association of Southeast Asian Archaeologists, June 17, 2002. Sigtuna Foundation, Sigtuna, Sweden.
- 2002b “The origin of the Janse collection and its problem” In the 17th International Congress of Indo-Pacific Prehistory Association. September 11, 2002. Academia Sinica, Taipei, Taiwan.

5. 研究の課題と展望

「ベトナム古代(史)考古学」には、「中国モデル」「ベトナムモデル」以外にも、東南アジアの「インド化(the Indianization)」という言葉説をはじめとした複数の解釈モデルや問題系が残されている。したがって個々の「解釈」は、そのような内部・外部の複数の視座から試され、形を変えていく可能性があり、それら複数の間を取り結ぶ実践的問題も含めて今後の課題としなければならない。そういった意味で研究目標そのものは未完であり、現地での調査研究を通じて解決しなければならない。今後は留学で得た大きな果実を生かしつつ、日本国内からベトナムの現在と未来を見据えて行きたい。



写真1 漢代墳墓と現代墓(タインホア省ドンソン県) 写真2 聞き取り調査風景(タインホア市富穀寺)



写真3 博物館内収蔵施設(青銅器)

写真4 タインホア省博物館



写真5 ハノイ歴史博物館スタッフ(整理室にて)

写真6 ホーチミン市ベトナム歴史博物館